人　富ゆえには　尊敬されず

松岡　俊二（大学院国際協力研究科助教授、社会科学コース）

ミンダナオ奥地の農村を行く

南国の強烈な朝日が照りつける中、僕たちはトラックを改造した乗合バスに乗りマハヤグを出発した。30分ほど昔の伐採道路を揺られ、それから徒歩で峠を、ココナッツ農園を、おまけに最後には橋なき川を越え、谷間の村ピラスへと到着したのは昼過ぎであった。

1994年３月、研究室の学生３名と一緒にフィリピンの地域開発と環境問題の調査にいった時の話である。人口200人ほどの村ピラスは、フィリピン南部のミンダナオ島の西南部サンボアンガ・デル・スール州の州都パガディアンの北40kmの山間に存在する。

貧困と環境破壊の悪循環

途中の山々はチガヤ科のコゴン草に覆われ、森林をみることは出来ない。1960年代の日本への丸太輸出のための商業伐採と、その後に伐採道路をつたって入植したビサヤ地方からの農民が、薪炭材の確保と耕地拡大を目的に皆伐してしまったという。92年夏に行ったマレーシア・サラワク州の熱帯雨林調査では、一見豊かに見える熱帯雨林と菌糸のように伸びる伐採道路周辺の自然破壊のすさまじさに驚いたが、ミンダナオでは森林そのものが、いわば電卓のオールクリアー状態であった。

しばしば途上国の環境問題は、「貧困と環境破壊の悪循環」と性格づけられる。貧しさと人口圧力のなかで、貧農たちは貧しさ故、急斜面などの脆弱な森林を破壊し、耕地を拡大する。その結果、土壌流出などにより耕作放棄を余儀なくされ、環境は破壊され、農民はますます貧しくなるといった論理である。

平均出生数6.4人で農業以外に就業機会のないミンダナオの入植農民に、環境の大切さを説くことは無意味だ。

ピラス村の農民

ダム開発と日本のODA

僕たちがピラスを訪れたのは、この村が日本のODA（政府開発援助）をあてにしたサルバレー・ダムの建設予定地であり、代替地などの補償計画があいまいなため、多くの住民が反対しているからだ。このダム建設計画は、ラモス政権がすすめている2000年にはフィリピンを新興工業国（NIES）にしようという地域開発戦略の一環で、この地方における最大のプロジェクトである。

この計画は、1987年に日本の民間コンサルタント会社がフィリピン政府を抱き込み、日本のODAプロジェクトにしようと画策したことに端を発している。日本のODAによる途上国のダム開発ということで、インドのナルマダ・ダムのように、日本の開発援助により途上国の住民が追い出され環境が破壊される、といった単純化をしがちであるが、問題はもう少し複雑だ。即ち、推進側のフィリピン政府も反対する住民もそれぞれの合理化のため日本の名を使い、日本政府（JICA）はこうした地域の実状を正確に把握する力がなく、的確な広報もなく、結果としていたずらに日本の評判を下げている。

今や世界最大の援助国となった日本は、本気でそれにふさわしいシステムを確立すべきである。お金を持ち、援助をしているだけでは、国際社会の「尊敬」は得られない。

砂防学の研究で各地をめぐって

海堀　正博（自然環境研究コース助教授）

今からおよそ18年前、土石流の現地観測を手伝って欲しいという先輩の誘いで信州上高地にある焼岳に行くことになった。大学に入るまで「砂防」という言葉も知らなかったし、特別に意識をしたこともなかったが、あこがれの上高地につれて行ってもらえるというだけですっかり乗り気になっていた。

はじめて行ったのは５月末頃からの１週間程度で観測機器の設営が主な仕事だった。連日重い荷物を背負子にのせて山に登った。外はまだ雪が残っていて気温が低かったが、気分は爽快だった。２度目はその年の７月末頃からの約２週間、ちょうど夏休みだったし、避暑気分で手伝えるということでまた喜んで出かけた。今度はいよいよ幻の土石流の観測だった。土石流が発生すると、谷底に張っておいたワイヤーセンサーが土石流に切られて電気系統のスイッチが入る。何日目かの真夜中、土石流の発生を知らせるアラームがなって観測ビデオのスイッチが入った。私もとび起きてモニター画面に見入った。数十秒後に土石流の映像をビデオに収めることができ、先輩と喜び合った。これがはじめてのビデオ撮り成功だった。このときの映像はその後土石流の挙動の解明におおいに役立った。天気が良くて土石流の発生見込みのない日は、山の上からふもとの大正池やまわりの山々、また、その近辺を蟻のように動きまわっている観光客をぼーっと眺めることもでき、ちょっとした仙人気分であった。

これをきっかけに砂防学研究室に入ったが、４年生になる直前の３月にはひと月間六甲山中での砂防学実習をさせてもらった。その後、甲府盆地と富士山への実習、長崎と島根の豪雨災害現場の調査、四国の祖谷渓谷での地すべり調査観測、有珠山への火山泥流調査、木曽御岳の大規模崩壊調査、桜島での火山泥流調査などと本当にいろんなところに行くことができた。また、25才の時にドイツ連邦共和国（当時の西ドイツ）へ16ケ月間の留学の機会にも恵まれ、砂防学発祥の地でもあるヨーロッパアルプスの山岳地帯各地をたずねまわった。特にこのときの経験は、専門分野の範囲にとどまらず、自然の風景から日照時間の季節変化、食べ物、飲物、文化や芸術、人間性までもがそれまでの自分が知っていたものとあまりに違っており、驚きと感動の連続であった。

世界的に有名な宮島の庭園砂防（地学実験でも毎秋訪問）

月日が流れて現在は、砂防学の専攻生には野外の自然にできるだけ親しんでもらい、自然界の変化をさりげなく感じとれるような人物になってもらえるように願う立場になった。机上の理論だけでなく、自然の現状分析だけでもなく、過去から現在そして未来への自然界の変化までも見定めた上での自然との一体感を感じることのできる、言いかえれば自然のわずかづつの変化をも自然体で感じる敏感さと無意識の何気ない気配りをもてる、余裕だろうか。専攻生にも、わが子にも、そんな余裕のある生き方をしてほしいと願う毎日である。当然、自分もそうありたいと思いながら、つい忙しさの中に忘れてきた心の余裕、それを取り戻すためにも、これからもきっと、いろんな自然の中のフィールドをたずねまわることだろう。

インド騙され日記

木本　秋津／佐伯　なおみ（自然環境研究コース３年）

大学２年の春休み、私達は、周囲の心配を半ば無視し、無理矢理にインドに冒険に出かけた。どこを観光するのか、どこに泊まるのか全く未定のまま、それでも何とかなるだろうという楽観的な私達はインドの首都、デリーに到着した。

まず、当然なことだが、空港を１歩出ると、インド人の「山」だった。インドなのだからインド人がいるのは当然だが、私達より色が黒く、目のぎょろぎょろしたインド人は、私達に「ここはインドなんだ。」という実感を初めて感じさせる存在だった。

そして予想に反することなく、インド人は手強かった。私達がよほど間抜けなカモに見えるのか、インド人は私達を実にたっぷり騙してくれた。リクシャーという乗り物に乗れば、ほとんど必ず怪しげな場所に連れていかれるし、怪しげなみやげ品を高くないと言っては売りつけようとするし…。そして、私達は、なぜか毎日のように同じ手口にひっかかり、インド人への敵意を燃やし続けていた。

それでも、デリーはよかった。私達が次に訪れた地、ヴァーナラシーはもっと恐ろしいところだった。私達がそこに着く２日程前にも、韓国人旅行者が殺されたらしく、その話をヴァーナラシーに着いてから知った私達は、今すぐにでもデリーに戻りたくなった。空港からホテルまではかなり遠く、私達は再び生きてこの空港に戻ってこられるのだろうかと不安でいっぱいになりながら、“Too much dangerous” と言われているヴァーナラシーの町へ向かった。噂どおり、危険がいっぱいで、怪しげなシルク工場に連れて行かれ、小さな個室に閉じこめられたり、20倍もの金額を騙しとられたり、私達はすっかり人間不信になり、インド人から逃げまわっていた。それでも、ヴァーナラシーに流れるガンジス河はやはり雄大で、感動した。とても神聖な場所で、人々はそこで死ぬことを心底望んでいるという気持ちが少し分かるような気がした。

結局、毎日インド人に騙され、逃げまわり、腹を立て、疲れ果てて、誰も信用できないほど人間不信になってしまったが、私はそれでもインドにはそれ以上の魅力があると思う。とてもひどい目にも遭ったが、インドには、それでもまた行きたいと感じさせる魔力がある。そして、今度は、私がインド人をぎゃふんと言わせてやろうと企んでいる。それでもまたインドに行けば、何度も騙されるのだろう。インドカレーの独特の味を懐かしく思い出しながら、私はそれがインドなのだとしみじみ思う。

ヴァーナラシーのガンジス川：ここでは船代に相場の20倍もの代金をとられた。

ドイツで春を見たこと

平原　靖子（人間文化コース事務官）

ボンの桜並木

寒いというだけで何もする気もおきない私が、あろうことか冬の様相を残しているであろう３月のドイツに旅立つことになったのはまさに運命のいたずら？　先陣の友人からそんなに寒くはないという情報は入ったものの、いやいや人を油断させておいて突然突き落とすのが意地の悪い気候の性格ってもんです。が、たまには人間、素直にならなきゃいけない時もあるって事を思い知ったのでした。そう、春を迎える楽しさを思い出させてくれたのがドイツだったのです。そして春には花が咲く、という当たり前の事をボーッと見過ごしていた自分に気づかされたのもドイツのおかげだったのです。

そして自分の無知さかげんにも、もちろんあきれたのですが、日本独特と思っていた花がドイツにも咲くのですね。れんぎょうとか桜とか。まったく、ボンで、ベートーベンハウスの近く、結構街中で桜並木（八重咲きでしたが）を見たときには『え、何で？』と思いつつもあまりに町並みにマッチしていたので、そしてなんだか不思議で（だって日本の商店街に花の咲く街路樹なんて見たことないでしょ）しばし考えこんでしまったのです。

と書くと植物に関する異文化のうんぬんに発展しそうですが、何のことはない私の単なる思い込みの事を言っているに過ぎないのです。桜が日本にしか似合わないっていう。思えばこの季節に来ることがなければ、永久に気づかなかった思いこみですね。そうです、どこの国だって一回訪れただけでいろんな事を思いこんじゃいけないなと改めて思ったんですよ。自己反省をこめて。

話を戻して、もう一つ、それら春の花々はほんとに自然の形で咲き乱れていることです。春を迎えて増水していたラーン川のほとりに群がっていたれんぎょう、みわたすかぎりの農地の端になんの手入れもほどこさぬまま、もみくちゃにからまった枝についている色鮮やかな花々、それらをじっと見ていると生命の力を分け与えてくれているようです。だからこそ、古今東西、春をたたえた音楽や絵画や文章が数え切れないほど生まれているのでしょう。ということにも気づかされた旅でもありました。

増水したラーン川

新任教官紹介

小川國治（地域文化コース教授）

本年4月1日付で山口大学教育学部から赴任しました。専門の授業科目では日本史研究、日本地域研究などを担当していますが、本来の研究は日本・近世社会経済史です。これまで大別して二つの分野を研究してきました。一つは、幕藩体制の崩壊過程を幕府の典型的な市場統制が現れている輸出品（俵物）に限定して考察を進めたもの（江戸幕府輸出海産物の研究）であり、いま一つは、幕藩制的市場の崩壊と国内市場の形成の問題を検討するため、明治維新で重要な役割を果たした長州藩を取り上げて究明したもの（転換期長州藩の研究）です。現在は後者に重点を置いて研究を進めています。新しい環境に早く慣れて、総合科学部の研究と教育に少しでも寄与できれば幸いです。よろしくお願い致します。

彦坂正道（物質生命科学コース教授）

新しく、ソフトマテリアル研究グループを作ることになりました。少し前までは、「鉄器時代」、今はシリコンがはばをきかせている「石器時代」です。これからは、生命も含めて、柔らかい分子からできたものの時代、「ソフトマテリアルの時代」なのです……。

京都で物理を学び、東京、山形、広島と転々し、生物物理、高分子科学・技術などの学際的な畑を歩いてきました。

「だれもやらないことをやる」、というのが好きです。「わかっていない不思議なことが、海辺の砂の数ほど（星の数ほど？）ある」、と実感したら、きっと調子がよいのです。それが通じると、世界は狭くなります。科学・技術では、本当の意味の創造性が、大切だからでしょう。

音楽や絵、文学、焼物なども好きです（下手の横好き）。たぶん、文化というのは、根っこがしっかりつながっているからでしょうね。

大木谷耕司（数理情報科学コース助教授）

4月より、京都大学数理解析研究所から本学部へ赴任してきました。

妻も私も関西地方を離れるのははじめてで、キャンパスを眺望できる職員宿舎での生活を楽しんでいます。現在は、微分・積分学などの講義を担当しており、また専門では自然界にあらわれる非線形現象、特に流体力学の基礎的側面に興味をもちその数学的、数値解析的研究に取り組んでいます。

私たちの身の回りにある“乱流”（大気、海洋などのでたらめに見える渦の運動）は計算機シミュレーションで再現ができるようになってきており、想像もできなかった複雑な振る舞いが明らかになりつつあります。このようなシミュレーションによって示唆された解の性質を基礎方程式から理論的に演繹する事が1つの夢です。どうぞよろしくお願いします。

乾　雅祝（物質生命科学コース助教授）

平成元年1月に京都大学大学院理学研究科を修了後、九大教養部教務員、助手を経てこの春赴任して参りました。九大では教養部最期の年まで在籍し、くしくも創立20周年を迎える総合科学部に参りましたことに何か因縁めいたものを感じてしまいます。これまで原子配列の乱れた系の物理的な理解を目指し、高温の液体状態にある金属や半導体を対象に実験的な研究を進めてきました。特に電子が物質中で示す様々な振舞いと構造との関係に大変興味を持っています。また構造不規則系の局所構造観測手段であるXAFS分光法とは大学院修士課程からの長いつき合いです。総合科学部では高温で、且つ高圧下の実験が行えることも楽しみにしております。移転した後の新しいキャンパスに迎えていただき、自然が多く日本酒も美味しいすばらしい環境で、がんばろうという決意も新たにさせられました。どうぞ宜しくお願いいたします。

トーマス・ウィン・ダッブズ
（外国語コース助教授）

I have a Ph.D. from the University of South Carolina where I specialized in English Renaissance Drama. My book, Reforming Marlowe (Bucknell, 1991) explores the critical history ofShakespear's notorious contemporary, Christopher Marlowe.

I am currently finishing a book on Shakespeare that will be entitled Shakespeare in Chains and that will examinethe ways in which academe has influenced the social reception of Shakespeare's work. I moved to Japan with my family only recently, and I am currently working to develop a larger understanding of Japanese culture, thought, and language. Mywife, Ginger, holds a B.S. in biology and wishes, in the near future, to conduct cross-cultural research on the differences between Japanese and American medical practices. I have a four-year-old daughter, Logan, who attends 'Seibo Youchien' and who proclaim a daily that she loves Japan.

西川節行（地域文化コース講師）

1958年三和銀行に入行以来、社会人としてやって来ましたが、この4月から主として留学生に対する日本語・日本事情を担当させて頂いています。銀行では、ロンドン、ニューヨーク、テヘランで10年余。帰国後関西経済連合会の国際部長として関西国際化の旗振り役を勤めました。新空港や学研都市の建設推進、また貿易摩擦対策の一環として、毎年経営研修など海外人材育成協力をやって来ました。この経験から「地域の国際化」をライフワークとしています。外国人や外資系企業の少ない国際都市などあり得ないというのが持論です。その後一時勤めた外資系事務所で「日本の10大都市の世界での知名度調査」をしましたが、広島は東京に次いで2位でした。この広島に名実兼ね備えた国際都市になってほしい。そのために、留学生諸君に将来いつか、自国の文化や産業をもって、広島に戻って来てもらえるようにしたい、というのが、私の夢であり、抱負です。

市橋　勝（社会科学コース講師）

1962年2月6日生まれ。北海道夕張市出身。1990年3月京都大学大学院経済学研究科博士過程中退。1990年4月～94年3月、高知大学人文学部助手及び講師として勤務。専門は経済統計論。

前任地の高知大学では、経済データとアプリケーションソフトを利用した経済情報処理実習の授業を行ってきた。

これまでの研究は主に、①日本経済における生産性と利潤率の推移、②日本の企業統計の問題点、③日本におけるエネルギー消費量の推移と環境問題に対する市場経済制度の意味論的検討、などである。現在の研究関心は、産業連関表を利用した新たな波及効果分析手法の開発である。

趣味は、スキー、映画鑑賞、ポップス音楽の鑑賞、カラオケ、酒、学生との議論……、俗物的なことは殆ど好きである。

東広島の地は全く始めてであるが、「豊かすぎるほどの自然」に少々戸惑っている。

李　東碩（社会科学コース講師）

専門の授業科目では国際開発論を担当しています。主にアジアを中心に、経済開発政策とそれに伴う諸問題に取り組んでいます。

1980年あの光州事件の年、韓国ソウル市の高麗大学経済学部に入学した私は、最初は自分の「出世」ばかり考えて、外交官の国家公務員試験を準備していました。ところが、強まる政経癒着と反人権的な開発路線を押し進める独裁政権に対し、沢山の友人とともに次第に反感を覚え、結局はいわゆる「一部小数過激派」となり、卒業まで戦いました。「開発」イデオロギーに深く汚染されている韓国社会を規定している国際社会の仕組みやその世界経済の運動主体である多国籍企業の運動法則とを解明するために玄海灘を渡ったのは、85年のことでした。それから今年3月31日まで、京都大学で世界経済論を勉強してきました。目下は、「アジアの国際分業構造と労資関係」というテーマで学位論文を準備しています。

松田謙次郎（外国語コース講師）

上智大学文学部英文学科を卒業後、同大外国語学研究科で修士号を習得、同研究科博士後期課程に進学の後、今年の3月までアメリカ・ペンシルバニア大学で6年間大学院生、および日本語講師をやっておりました。日本語教師から一変して4月からは英語教師となり、己の腰の軽さ加減に呆れる暇もなく、32才にして初めて得た定職の味をかみしめつつ、高校以来という巨大キャンパスを目を白黒させながら走り回っております。専攻は社会言語学、特に言語変異・変化理論ですが、これは一口にいえば、自然談話に現れる多種多様な言語変異現象を多変量解析を通して、言語変化の規則性を導き出そうとするものです。現在は東京方言の格助詞ヲの脱落の分析を、言語的要因や話者の社会的属性の両者を含めながら行っております。言語変化は、私にとり言語学を始めて以来のテーマですが、その結果いかなる論文を読んでいても変化および変異の問題と結び付けるという癖があります。

予想に反して極めて居心地の良い西条キャンパスについて不満があるとすれば、温水プールと、大学のシンボルとしての塔を持たないことでしょうか。あらゆるスポーツのなかで唯一水泳のみ満足にこなし、あらゆる建造物のなかで塔と廃虚を偏愛する私は、今日もその二つが突如として蜃気楼のごとくキャンパスに出没する日を夢見つつ、ぼんやりと研究室の窓からの風景を楽しんでおります。最後になりましたが、電子メールの住所は kenjiro@ue. ipc、研究室はA422です。御興味のおありの方は、御気楽に御来室下さい。どうぞ宜しくお願いします。

ジョゼフ・ジェイムズ・ラウアー
（人間文化コース講師）

今年度より人間文化コースで英語を担当しています。専門は、言語学と現代日米比較文化です。ピールで有名なミルウォーキー出身です。ウィスコンシン大学で政治学とジャーナリズム学を専攻して卒業後、US Peace Corps を通して英語教師としてモロッコで働きました。異文化での英語教育の経験は、言語学を専攻する機会となりました。その後、グアテマラ、日本、アメリカで英語教師となり、母校のマジソン校にて言語学の修士を習得して、前任校、立命館大学で講師として6年間働きました。そこではTOEFL集中講座のアシスタントコーディネーターとして成果を上げることが出来ました。学生に英語を教えると共に日米比較文化について語り合えることが楽しいです。

趣味は、スポーツ　囲碁　科学雑誌の読書です。東広島に妻と息子と住んでいます。これからよろしくお願いいたします。

ジェローム・フランクリン・シャピロ
（人間文化コース講師）

子供の頃、私は日本の童話や怪獣映画、特に「ゴジラ対モスラ」のような映画のとりこになった。大学では哲学、美学、芸術史を学んだが、ジョン・ポーマンの「エクスカリバー」によって、神話と映画に対する興味を再度かきたてられ、比較文学の道に進んだ。後に、早稲田大学在学中、広島と長崎を訪れ非常に心を動かされた。私は原爆と核のイメージ（現実ではなく）に強い興味を抱いた。これらの映画におけるイメージを研究することにより、受難を乗り越えるために人間が用いる心理的・社会的メカニズムをより深く理解したいと考えている。これらのイメージを理解するために、私は自分がこれまでに学んだ様々な分野すべてを用いている。また、子供・教育・家族のイメージなど、他の、映画と文化の関係についても研究を進めている。最近は様々な少数派アメリカ文学、特に日系、ネイティブアメリカン、ユダヤ系の文学の比較研究も行っている。映画や小説、漫画を愛好しているが、私の研究においてはそれらはより深い人間性を理解するための媒体に過ぎない。私にとって重要なのは、日常・世俗において何が大切・特別な意味を持つのかを理解することである。したがって、私は自分の住む世界についてもっと学ぼうとしつつ、自分流のやり方でいまだに哲学を勉強しているのだ。Scholarship とはそうあるべきではないかと思う。

中山裕道（数理情報科学コース講師）

5月1日付けで理学部から参りました中山です。西条も既に2年になり、ようやくここでの生活にも慣れてきました。2年前といえばプールバールも西条バイパスの南側しかなく、大学行きのバスのほとんどが375号線を通っていました。その後西条バイパスも全通し、最近ではプールバールの新しくできた部分にお店が立ち並び始め、日増しに活気づいています。ところが私の住んでいるところはいうと御薗宇の三永水源地寄りということもあって2年前とまったく変わっておりません。むしろ375号線を通るバスの本数が減ったことで交通の弁は非常に悪くなってしまいました。しかし、今はそこでの生活をかえって楽しんでいます。田植えや稲刈りで四季を感じ、窓に寄ってくる雨蛙をペットと思ってかわいがり、これまで味わうことのできなかった自然の中での生活を満喫しています。これからも西条を楽しみたいと思っていますので、よろしくお願い致します。

彦坂　暁（物質生命科学コース助手）

京都大学理学研究科博士課程（動物学専攻）を修了し、4月に赴任してきました。大学院ではホヤの胚発生機構を研究してきました。総合科学部ではカエルの変態機構を研究するつもりです。動物の体を作る様々な細胞がどのようなメカニズムで出来てくるのかを分子レベルで理解したいというのが、一貫した研究テーマです。

さらにいえば、進化の過程で多細胞動物が最初に現れたとき、かれらはどのような姿をし、どのような胚発生を行なっていたのか、そして現在見られる多様な動物の形態は、その発生メカニズムのどのような変化によって可能になったのか。これが私の最も根底にある興味です。過去を再現する手段を持たない我々には、知ることが不可能な問題のかもしれません。しかし現存の生物たちの発生機構をより深く理解し、比較し、抽象することによって、答に近付けるのではないかと、これは夢ですが、思っています。

平山恭之（自然環境研究コース助手）

広島大学総合科学部を卒業後、広島大学生物圏科学研究科博士課程前期・後期を修了し、4月から助手として採用されました。これまでに、中国地方に分布する変成岩の変形構造や放射年代の研究および、地下深部で形成された高圧変成岩がどのようにして地表まで上昇してくるのかを研究してきました。

思えば広島大学に入学し、初めて広島の地を踏んでから既に10年目を迎えており、長かったような短かったような感慨深い思いをしています。当時は自分が地学を専攻するなどとは全く考えていませんでしたし、まさか総科の助手になってしまうとは今更ながら不思議な気がしています。これはひとえに総科の自由な教育システムのおかげでした。今後は総合科学部出身者の名に恥じないように、研究および学生の教育に努力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

村上久恵（外国語コース教務員）

この春、広島大学文学部を卒業し、4月より教務員としてＬＬ準備室に勤務しております。文学部ではドイツ語学ドイツ文学を専攻していました。

1年前にはまさか自分がそのまま広島大学に勤務することになろうとは夢にも思っていませんでしたが、学生時代に過ごすことのなかった、緑豊かで広々とした西条キャンパスで仕事をすることができ、嬉しく思っています。

ＬＬ教室の運営及び管理が私の主な仕事です。従ってＬＬ機器をはじめ、コンピュータ、教材編集装置と様々な機械の操作方法を習得しなければなりません。2ヶ月半経過し、全くの初心者だった私も基本操作は身に付いてきましたが、ＬＬの高度な操作やコンピュータに関しては、まだまだ機械に使われているといった感じです。これらをきちんとマスターし、国立大学で初めてという立派な設備をフル活用できるようバックアップしていきたいと思っています。

岩上辰男先生の思い出

中央が岩上辰男先生

数理情報科学コース助教授の岩上辰男先生は、去る5月20日に腎臓癌のため逝去された。昨年の10月からは入院され闘病生活であったが、生来御丈夫だった先生が53才の若さでこのように早くお亡くなりになり、改めて人の世の無情をしみじみと痛感していると同時に、かけがえのない親友を失ってしまった深い悲しみに打ちひしがれている。

振り返ってみると、岩上さんが20代の後半に東京教育大学の助手から広島大学教養部の講師に赴任して来られて間もない頃、理学部で開催された数学の講演会で偶然に同席した時であった。そして、その時の活気に満ちた様子が今でもはっきりと思い出されてくる。その後間もなくして、私も理学部から教養部にお世話になって、岩上さんとは大の仲良しになった。昼休みの時間などには、お互いに部屋を訪れて、毎日の生活での楽しい出来事などを気を使わないで話し合うようになり、そこで物事に対するいろいろな考え方・見方というものをいつの間にか教わっていた。岩上さんは物事の本質を鋭く見抜いておられ、雑談をしている際にもそれが時々感じとられた。そして文学、芸術にも造詣が深く、読書人であり、音楽は特にモーツァルトのものを好まれ、また美食家でもあり、人間的には心豊かな優しい人であった。

岩上さんの研究分野は数学における代数学であった。最近の7、8年の間は一貫して、標数が2と異なる可換体の上の2次形式の代数的理論を研究された。この理論は体Ｆの上の正則2次形式の同値類全体から標準的な方法で構成される可換環 W(F)（Witt 環）を主な研究対象とするもので、体Ｆの性質を W(F)の構造によって記述する方法が多くの研究者によって提唱されている。岩上さんはこの理論を広い視野に立って研究中であったし、成し遂げようと思っていたことが具体的に沢山あったことを思うと残念でならない。

私はこれまでに岩上さんから得た様々なことを心の糧として大切にし、今後のいろいろな場面で活用して行きたいと考えています。

岩上さん、いろいろとお世話になり、大変有り難く思っております。御冥福を切にお祈り申し上げます。

（数理情報科学コース　教授　吉田敏男）

学部記事

□1993年度・卒業論文テーマ一覧

地域文化コース

井上　珠美(朝倉)　和歌文学における祈りの系譜

梅田　文彦(楠瀬)　マラッカの貿易－15世紀から17世紀の香料・米・綿織物の流通を通して

岡島　寛(鹿野)　1950年代のアメリカ社会に見られる諸特徴
－エルヴィス・プレスリーの出現とその意義－

岡野　正明(樫原)　新見南吉論

尾崎麻衣子(図府寺)　西洋美術における女性像に関する考察
－サロメ研究－

梳島　千波(藤井)　東アジアの食文化　日韓の香辛料・調味料の使い方とその背景

北村　綾乃(青木)　人形浄瑠璃芝居の研究

河野　徹(水島)「中原中也研究」
－幼年時への回帰をめぐって－

庄崎　孝子(佐野)　アメリカにおける女性の職場進出と男女関係の変遷

中室　秀子(朝倉)「発心集」の研究

西村　由史(高谷)　蘇る死体－ヴードゥ教ゾンビーの世界

浜田明日子(小池)　沖縄音楽－人々のくらしとの関わりを中心に－

森野　美和(水島)　グリム童話の異世界

片山　一俊(マハラジャン)　フィリピン援助とフィリピンの自立
－民間投資と円借款，その内容について－

神崎　和子(楠瀬)　中国新時期文学における伝統意識
－「ルーツ探し」文学の求めたもの

国原　陽子(佐野)　アメリカ多文化教育とそのディレンマ
－ワシントンD.C.のベル多文化高校を事例として

前川　智子(佐野)　アメリカ公民権運動における宗教の果たした役割－マーティン・ルーサー・キング牧師とマルコムXを事例として

堤　豊治(古東)「メルロ＝ポンティの後期存在論」

山口　一実(長田)　騎士制度の変遷

社会科学コース

井川　健一(岩田)　アメリカのキューバ危機決定再考
－公開されたソ連側資料を用いて

大野　久夫(中逸)　系列の実態と変容
－自動車産業(マツダ)の現状から－

大部　勝基(秋葉)　ニューメディアに関する一考察
－広島市におけるCATVを事例として

沖　安津子(水島)　日本における企業の政治献金
－八幡製鉄政治献金事件再考－

垣田　雅典(水島)　日本の国際貢献と国際連合平和維持活動等に対する協力に関する法律

河口　真紀(秋葉)　公共空間の使用
－放置自転車問題を手がかりとして－

川村　研一(岩田)　APECにおける地域協力の可能性
－参加国の中のグループ化に注目して

金野　貴志(奥村)　日本テーマパーク産業の実態分析と今後の成長に関する研究

佐々木浩子(安野)　ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体に関する一考察

繁村　裕子(安野)　ザール問題における独仏問題の展開
－対立から協調関係へ－

白神　奉子(秋葉)　痴呆性老人問題とケアの質に関する社会学的考察

玉井　雅子(中逸)　地方の空の国際化
－国際線開設に向けての自治体外交－

辻本　勝久(中逸)　新広島(国際)空港開港をめぐる政治経済学

中里　雄治(奥村)　日本の対アジア貿易－水平分業の進展－

中村美江子(水島)　ナチス犯罪追求の制度について
－旧西ドイツを中心に－

南場　千里(鯵坂)　向老期の老後不安と老後への対応

西　千穂(鯵坂)　女性労働と性別役割

橋本まゆみ(舟橋)　今日における従軍慰安婦問題の一考察

原　貴(松岡)　都市開発に関する社会経済的研究
－開発利益の測定をめぐって－

樋口　朝子(浜渦)　中国華南地域における改革・開放政策の展開

平岡由美子(松岡)　地域振興に関する社会経済的研究
－ハウステンボス事業を中心に

平野　裕次(松岡)　一次産業と環境問題
－タイ農業の生産関数分析－

平本美弥子(奥村)　日本の対欧米投資－EC市場統合に伴い変化していく日本の対EC投資について－

福島　由美(中逸)　帰ってきた日系南米人と現代日本社会
－広島での実態を中心に－

福留　常徳(市川)　アメリカにおける兵器製造技術と一般産業技術
－工作機械を中心として－

藤田　博子(秋葉)　ホームヘルパーの仕事とその専門性

正本　智恵(富井)　地方自治体の環境政策と住民の位置づけ
－水環境を中心に－

松本　睦(材木)　働きすぎ社会＝日本の労務管理
－人事考課を中心に－

三木　泰英(田村)　小選挙区制導入の批判的検討

三井　亮一(市川)　両大戦間期ドイツ自動車工業における技術形成

山場　淳史(鯵坂)　都市近郊村落の里山共同管理の実態と方向性

横田　凡子(岩田)　CSCE機械化の特殊性
－プロセスの区分と国際機構類型化を利用して－

横山　久生(松岡)　建設系廃棄物の発生・運搬処理に関する研究

吉田　浩(岩田)　アメリカの中東政策と在米ユダヤ人
－在米ユダヤ人の多様性と影響力に注目して－

吉本かおり(水島)　国連による平和維持活動の研究
－その評価を巡って－

外国語コース

石原　和枝(吉田)　A study of *The Planet of Junior Brown*
『ジュニア・ブラウンの惑星』に関する研究

岡崎　里香(リナート)　Changing Images of Japanese in American Films:
アメリカ映画における日本人のイメージの変化

生塩　詞子(ゴールズベリ)　Language, Cultures and the Perception of Color 言語，文化及び色の知覚

梶　由紀(伊藤)　Witch and Womanhood in Hawthorne Focusing on "Young Goodman Brown"
ホーソーンにおける魔女と女性性
－『若きグッドマン　ブラウン』を中心に

小島　美紀(リナート)　A Comparison Study of Responses to Compriments in American-English and Japanese
ほめ言葉の返答における日米比較研究

佐藤　元美(シュライナー)　The "New Lost Generation" in 1980s American Fiction: Cultural Malaise in the Novels of the Brat Pack
1980年代のアメリカ文学における"ニューロストジェネレーション"：ブラットパックの作品にみられる文化不安

新町　智美(岩倉)　A Study of Japanized English Expressions
外来語研究

田原　智恵(山田)　An Analysis of English Word Recognition Errors in a Dyslexic
難読症における英単語認識の誤答分析

西山　祥子(上原)　Stereotypes and Prejudice－Images of Blacks and Whites in advertisements
民族的ステレオタイプと偏見　広告にみられる白人と黒人のイメージ

野田　千裕(小島)　世界と人間　ミヒャエル・エンデの作品を通して

堀江　恭子(山田)　A Study of Individual Differences in Language Judgment
個々人における言語判断の違い

溝口　康代(藤本)　A Study *Gulliver's Travels*
『ガリヴァー旅行記』研究

光山　素子(藤本)　On the Early Plays of W.B.Yeats
イェイツの初期の劇作品について

元山　朝賀(ゴールズベリ)　KIKOKUSHIJO: A study of Cultural Adjustment Relating to Japanese Students Returning from the U.S.
帰国子女：米国帰国子女に関する文化適応の研究

森川　邦美(小野)　Third Language Learning: Analysis of Written and Spoken Production of Japanese German Language Learners
第三言語修得：日本人ドイツ語学習者の学習過程におけるプロダクションの分析

山懸あゆみ(シュライナー)　Problems of Womenhood and Cross-Generational Expression in Amy Tan's *The Kitchen God's Wife*
エイミィ・タンの『キッチンゴッズワイフ』における女性性の問題と世代間表現について

横　彰美(ゴールズベリ)　Japanese Stereotypes in Movies
映画にみる日本人のステレオタイプ

横山　昭子(伊藤)　Edgar Allan Poe in Japanese Popular Literature Focusing on Ranpo Edogawa
江戸川乱歩を中心とする日本大衆文学の中のE.A.Poe

渡部　有紀(ルー)　Das Bild der Frau in der japanischen und deutschen Anzeigenwerbung
－Selbstbetrug durch Werbung－
日本とドイツの広告に見られる女性像の研究
－広告に潜む偽りの満足－

重藤　睦子(要田)　The Public House in England　イギリスのパブ

満田千賀子(小野)　Das Schlangenmotiv in deutschen Sagen und Marchen
ドイツの伝説・昔話におけるヘビのモティーフ

松本　真次(安仁屋)　An Analysis of the Syntax of the Existential *There*－Construction
存在文の構造及び生成過程の分析

数理情報科学コース

阿部　光邦(阿賀岡)　高次元の正多面体について

荒木　裕子(水上)　構造的、非構造的不確かさを持つむだ時間システムにおけるロバスト制御

伊賀上美香(水上)　ファジィ制御の適応制御への応用

池田　圭子(桑田)　一部実施要因計画の研究

石橋　珠美(水上) 離散時間ディスクリプタシステムの二階層決定問題に関する研究
磯野　雄一(吉田) ホモロジー群とその幾何学的応用
井手　和久(久保) 高次元パーコレーション
居藤美恵子(正法地) ヒトの成長予測の研究
上野裕佳子(阿賀岡) 正多面体と準正多面体
岡部　信哉(阿賀岡) 曲面上のリーマン幾何学
小幡　浩司(阿賀岡) 微分幾何学的曲面論
久保岡　尚(山懸) 制約充足問題における制約の管理と併合法による解決
佐々木　恒(水上) ニュートラルネットワークの線形最適レギュレータへの適用
佐藤　勝彦(水田) 解析関数とリーマン面
志俵　洋子(桑田) 直交配列の研究
曽田　宏昭(水田) 偏微分方程式へのグリーン関数法の応用
高島　正敏(中原) 関数型言語の基礎理論
竹ノ内一雅(正法地) 広島市における学校保健データの追跡調査
原　浩二(久保) パーコレーションにおける無限クラスターの研究
前田　尚志(山縣) トランスピュータにおける並行プロセスの実現機構とその図形処理への応用
宮奥　健人(原田) 掃引曲面生成のためのデータ圧縮法に関する研究
山形　真一(吉田) 結び目・絡み目の不変量の研究
吉田　誠信(水田) 常微分方程式におけるグリーン関数法の応用
米田稚枝子(宮尾) Pascal プログラムの CAI を目的とした視覚化処理系の開発
若林　洋司(正法地) 成長予測のための成長パターンの分類
昭山　朋宏(伊藤) 順序集合について

物質生命科学コース

岩越　栄子(宗岡) ナマコの生理活性ペプチド
内田　知宏(宇田川) Nd_2CuO_4 ：F のラマン散乱
大西さつき(深宮) 中国産ニガキ科植物中の生物活性物質
柿井　章江(好村) リン脂質－水系における構造相転移の研究
河西美奈子(武森) 小脳の一酸化窒素合成酵素の活性測定法と部分精製
勝原　弘樹(手島) 光合成光化学系の電子伝達について
児高　拓爾(山下) 2波長励起法による分子固体のキャリクタリゼーション
古手川　尊(筒井) 鳥類の脳内オピオイド・ペプチドの単離
三林　弘和(星野) Dynamical Simulated Annealing 法による電子状態の研究
忠岡　敏博(藤井) 近藤半導体 CeRhSb の単結晶を用いた研究
中坊　晃(松田) 高エネルギー核子－核子散乱におけるスピン軌道相互作用の研究
中村　恵(岡野) エチオピア産ニガキ科植物中の生物活性物質
長尾　道弘(武田) マイクロエマルジョンの構造相転移のX線小角散乱による研究
原田　明(小島) $U_3Pt_3Sn_4$ の核磁気共鳴
樋口かおり(小南) 副腎皮質ホルモンの合成に及ぼすアラキドン酸代謝阻害剤の影響
久田　誠司(田村) 液体イオウのレーザー励起過度吸収スペクトルの測定
日野　豊　(重中) ユーグレナ運動の機構に関する研究
藤井小枝子(赤堀) 光合成光化学系II低分子量蛋白質の単離
古荘　佐和(播磨) TOF 法を用いた分子固体中のキャリヤーの移動度評価
前田　弘美(渡部) Reverse Monte Carlo 法による液体の構造の研究
南　努(高畠) 酸化物高温超伝導体 $YBa_2Cu_3O_7$ (YBCO, Tc=90K) のトンネル効果
村岡　直子(渡邉) ニワトリ胚頭部前軟骨細胞の増殖と分化に対するレチノイン酸の働き
山本　幹雄(永井) 狭いバンドにおける BCS 超伝導状態
吉野　雄信(藤井) Mg を含む水素吸蔵複合材料の物性研究
米澤　直美(竹之内) 有限要素法による広島湾の潮流解析
田賀　圭治(桧原) $YbMCu_4$ (M=Pb, Pt) の核磁気共鳴
山下　裕子(播磨) パソコン制御による電気化学システムの開発

自然環境研究コース

赤井　裕(早瀬)「人間社会システムにおける環境監査とその方法論の確立に関する研究」
－㈱オストランド社を実験系として－
足立　宗久(開發) 黒瀬川流域御園宇谷底平地の地下水流動
安藤　裕一(福岡(義)) 周辺微気候に及ぼす池の影響
池上　佳志(中越) 環境計画のための景観生態学的研究
－瀬戸田町における景観環境計画－
石田奈都子(日下部) カボチャ胚軸におけるアポプラスト中のインドール酢酸の定量
井上　雅仁(中越) 芦田川水系の河辺植生
織部　隆明(内海) 小惑星と彗星の軌道計算
蟹由　昌美(堀越) 河川氾濫原における VA 菌根の形成について
木原　丈晴(中根) 冷温帯落葉広葉樹林におけるササの土壌炭素循環に及ぼす影響
国宗　清隆(原) 硫化カルボニル等の微量含硫気体のモニタリングと発生源に関する研究
黒田　華織(堀越) 植物根分泌多糖類の土壌微生物に対する影響

高橋　努(浅井) 広島における酸性雨と風系の関係
－夏期の降雨にみられる低 pH について－
竹野　律子(藤原) 大気中および雨水中の有機酸の測定
－大気中の有機酸の発生機構および雨の酸性化に及ぼす影響についての考察－
永木　庄治(福岡(義))「中国地方の気候地名に関する研究」
西井　渉(本田) クローバー中のモンキチョウに対する産卵刺激物質に関する研究
馬場　智子(開發) 西条盆地黒瀬川流域の河川水質
藤原　裕巳(設楽) 生態系における亜酸化窒素の生成と消滅に関する微生物の役割－特に非脱窒菌，非硝化菌の検討－
松山　弥生(日下部) オオムギの茎の強度に関する研究
三井　正勝(佐田) 東広島市広島大学キャンパス付近の第四系の層位と地下構造に関する研究
向井　靖子(藤原) 瀬戸内海魚類中の水銀の測定と分布に関する研究
村田　靖雄(櫻井) わい性系統大麦“渦赤神力”と正常種“並赤神力”中におけるインドール化合物の定量
山本　七重(富樫) マツ材線虫病媒介昆虫からのマツノザイセンチュウの離脱とそれに関与する要因の解析
渡辺　竜五(櫻井) 矮性および正常オオムギ幼葉鞘のグルカナーゼ活性の比較

生体行動科学コース

赤塚　陽子(堀) ニオイが脳波活動に及ぼす影響とその心理的作用について
石田　順子(西村) 老人の人格に影響を及ぼす要因のついての研究
牛尾　良子(堀) 入眠期における注意機構の変化について
大谷　浩司(生和) ストレス状況が情報の選択処理に及ぼす影響
梶山　祥子(小村) ハーフタイム中の回復運動の効果に関する研究
小鮒　潔(林) 災害文化の継承と変容
－日本海中部地震10年後の現状－
佐々木　孝(藤原) 社会的スキルが会話行動に及ぼす効果に関する研究
園田　富美(黒川) 性役割をめぐる自己概念及び規範意義に関する分析的研究
高木　豪　(西村) 質問紙法による防衛スタイルの測定
中野　陽子(林) 人間関係における認知次元の包括的検討
錦織　美鈴(新畑) 運動後におけるスポーツマッサージの疲労回復効果について
早井　昭(菊地) 青年男子の腰痛経験と脊柱彎曲度および脊柱可動度に関する研究
平岡　香織(生和) パーソナリティ特性が刺激に対する感受性に及ぼす効果
平野　敦子(堀) 事象関連電位に及ぼすウルトラディアン・リズムの影響
福山　美紀(新畑) 夏期テニス合宿における疲労軽減のためのスポーツドリンク飲用の検討
－血漿 CPK 活性値の変動を中心として－
堀内多恵子(生和) HR の偽フィードバックが高所恐怖反応に及ぼす影響についての検討
松田　大治(黒川) 独立的・相互依存的自己解釈概念尺度の妥当性の吟味
三島　和幸(藤原) 自動的言語処理と意識的映像処理が怒りの情動及び攻撃的行動に及ぼす効果
室　佳孝(上領) 酵素ペルオキソームに見出された分子シャペロン様蛋白質の構造と機能
森田貴美子(河原) アフリカツメガエル肝細胞の変態における最終分化機構についての研究
渡部　兼一(藤原) 認知欲求が広告接触行動に及ぼす影響についての検討
木下　和紀(坂田) ラットの時間弁別学習における観察反応の形成
佐々木信哉(菊地) 等速性筋力の両脚の差に関する運動生理学的研究